

入館者4000人に 宮城と東京が 県外1位競う



深澤村長の等身大の慈愛あふれる笑顔が、ホットな空間を感じさせ「生命尊重の心を伝える館にふさわしい」と好評の館内。

深澤晟雄資料館の入館者は昨年10月19日オープン以来8月16日で4000人に達しました。6月5日に3000人だったので2ヶ月余りで1000人が加わりました。県内では盛岡903人、西和賀653人、北上415人、奥州297人など合計3085人。県外では宮城243人、東京231人、秋田130人に千葉、神奈川県が続いて合計915人を数えています。

東京からは翌17日、30人の団体が来館したことで宮城を抜いて東京が県外トップに躍り出ました。最近では首都圏を中心に県外からの来館が増加傾向にあり、そのほとんどが町内の温泉旅館に宿泊することから観光面からも資料館の果たす役割が注目されています。

東京の大学生 ラッキー入館

4000人にあと3人に迫った8月16日午後3時過ぎ、その時を待っていたかのように盛岡から来たという3人連れの家族が入館してきました。しかも、3人目に入館したのは深澤晟雄を勉強しているという東京の大学生で平澤傑(すぐる)さんでした。お盆で帰省中

に両親と資料館を訪ねたもので、まさに、深澤晟雄に導かれるように4000人目の入館者となりました。

平澤さんには深澤村長時代の肉声と「深澤晟雄を讃える歌」の入ったCDを記念に差し上げました。平澤さんは感想ノートに「深澤村長の偉業を後世に伝えて行きたい」という思いを記して資料館を後にしました。

早くも5000人達成が話題になっていますが、ちなみに4月以降8月末までの入館者は2001人で月平均400人となっています。

月曜日は休館

資料館は月曜日休館です。ただし、事前予約があればその時間だけ開館します。また、月曜日が祝日の場合は翌日休館となります。

なお、9月21日(月)はその後も連休となりますので28日の休館日まで無休です。



「深澤村長との 出会い忘れずに」

8月14日、秋田県能代市でコマツブルドーザーなどの重機を扱う株式会社秋田重車輛の会長・佐藤成孝氏（81歳）が資料館を訪ねました。氏は50年ほど前に深澤村長が除雪を始めたころの出会いを感動的に話され、その内容は貴重な歴史の証言ともいえるものでした。紙面の都合上、主な点をまとめてご紹介します。

氏は終戦後、秋田トヨタ自
動車に入社して整備工時代に、米軍の車両整備や米軍払い下げのブルドーザーの修理なども手がけていた。沢内村で進駐軍払い下げのブルドーザーで除雪を始める

（資料館事務室で）

「私が今日あるのは深澤村長のおかげ」と語る佐藤成孝氏。

ルドーザーで除雪を始めるとき、氏が深澤村長の目の前で除雪してみせたという。盛岡の建設機械などを扱う第百商会専務当時、沢内村のブルドーザーをたびたび修理していた。特に進駐軍のブルドーザーは故障が激しく、修理費を安く上げるために、自分で部品を旋盤加工して交換したりした。そして、自分が一度でも手がけた機械は責任を持つという信念で、修理後のアフターサービスを毎月実施していた。

その日もアフターサービスの点検をしていたときだった。じつと後ろで見ている人の気配を感じて振り向いたら、そこに深澤村長が立っていた。「ご苦労さん」と声をかけるなり、くるりと背を向けて目頭を押さえていた。たぶん、オペレーターから無料サービスで点検していることを聞き、感謝の涙だったろうと氏は感動的に当時を振り返る。（編集部注：「村長ありき」によると故障の多い除雪機に村民の除雪への信頼が薄れ、深澤村長が窮地に立たされた時期があった。）

そして氏は、深澤村長のオペレーターに対する思いやりの場面も見ている。地元の人に「チヨ」と呼ばれていた深澤千代志さんに「あなたの腕に村民の願いがかかっている。風邪を引かないように気をつけて頑張ってくださいね」と温かい言葉をかけていた。氏は、こうした深澤村長との出会いを、能代市で創業した会社経営に生かしている。「おごらず、飾らず、本音で生きる」を座右の銘として「真実・信用・奉仕」の心を深澤精神に重ね合わせて生きてきたと言う。

お客様との
出会いから

資料館スタッフがお客様との会話で勇気つけられた感動の言葉…。

「命の大切さ」全国へ

「いのちの作法」を観て感銘を受けたという県外のお客様さまが見えました。「深澤村長は2期8年間だけでした」と説明すると、驚きを隠せない様子で「たった2期でこれだけの事が出来る人はいない」と涙ぐんで声を詰まらせる程でした。

「今の時代にこそ必要の人。今だからこそ、命の大切さを資料館から伝えて欲しい。映画『いのちの山河』の上映も心待ちにしています」と言われ、また必ず来ますとなごり惜しそうに帰られました。

お客様の一言ひとこと、重みを感じ、資料館から「命の大切さ」を全国に向けて発信して行きたいと強く感じた日でした。（深澤）